

# 新旧事業者のキーマンが一堂に ポスト3Gの動向も要チェック

10回目を迎える「ワイレスジャパン」。  
今年の展示やセミナーでは、携帯電話事業への新規参入、  
コンピューター業界主導の新ワイレス技術の台頭など、  
マーケットの転換期を予感させる事象が多く見られそうだ。

7月13日～15日、東京・有明の東京ビッグサイトで、移動通信関連ビジネスの専門イベント「ワイレスジャパン 2005 (EXPO COMM WIRELESS JAPAN 2005)」が開催される。

ワイレス&モバイル分野の最新技術とサービス、ソリューションを一堂に集めた専門展示会として知られるこのイベントも今年で10回目。昨年に引き続き、次世代ユビキタスネットワークの最先端技術をテーマとする「次世代ワイレス技術展」(ubit: Ubiquitous Technology on Wireless)」が併催される。

また、高度交通システムをテーマとした「ITS EXPO 東京会場」とユビキタスネットワークとロボットをテーマとする「ネットワークロボット展」の2つが新たに併催イベントに加わ

り、より幅広い来場者の関心に応えるものになるという。さらに、イベントのもう1つの柱である専門セミナーも、併催展を含め過去最大の130セッションに拡大される。

今年のワイレスジャパンの見所はどこになるのか——移動通信市場の最近の動向を軸に予想してみた。

## 新規参入の影響は？

今年の移動通信業界の最大のエポックは、1994年以来となる携帯電話事業への新規参入が認められたことだろう。

6月に総務省が公表した参入方針案で、2GHz帯のTDD方式1社、1.7GHz帯のFDD方式2社の新規参入が認められることになった。さらに、東名阪では既存事業者に対しても

1.7GHz帯が追加割当てされることになった。

1.7GHz帯にはADSL大手のイー・アクセスとソフトバンクBBが新規参入を希望し、ボーダフォンとNTTドコモが追加配分を求めて

いる。2GHzにはベンチャー系のアイピーモバイルが参入を表明している。方針案はこれらの事業者すべてに帯域割当てのチャンスを与えるものとなった。新規参入事業者は年内に正式決定、早ければ2006年度中にサービスが開始される見込みだ。

注目ポイントの1つはやはり、これらの新規事業者の参入戦略だろう。すでにイー・アクセスは、既存事業者の半額以下となる料金設定や、MVNO事業(仮想移動通信サービス事業者)を柱とすることなどを表明。新規参入を機に、競争環境や移動通信サービスの姿が劇変する可能性もある。

13日に開催される「日本のモバイル市場の変革」と題したセッションには、KDDIの小野寺正社長、NTTドコモの石川國雄副社長、ボーダフォンの津田志郎会長、イー・アクセスの種野晴夫社長、ソフトバンクBBの孫正義社長など新旧事業者の経営トップが顔をそろえる。この場で、新規事業者の参入戦略、既存事業者の対抗策が明らかになるだろう。なお、このセッションには、ポスト3G規格の1つといわれるWiMAXの事業化を推進するYOZANの高取直社長も登壇する。

また、展示会場のイー・アクセスブースでは、同社の新規参入戦略や、想定するサービスイメージを垣間見ることができそう。

新規参入を巡る論議が活発化する中で、既存事業者は3Gインフラの構築をほぼ完了。関心はその上でいかに付加価値の高いサービスを実現するかに移っている。こうした動きを如実に表しているのが端末の進化だ。

NTTドコモやKDDI、NEC、パナソニック、東芝をはじめとする端末メーカーのブースでは、来春開始予定の1セグ放送に対応した端末をはじめ、非接触IC搭載型、フルブラウザ搭載型、PDAベースのスマートフォンなど、多彩なモデルが多数出展されるものとみられる。

こうした端末の進化は、定額料金制の導入などに伴い、通信事業者の戦略が非トラフィック収入の拡大に軸足を移していることを反映したものといえる。

14日の「次世代モバイルコンテンツ・プラットフォームの開発」、15日の「3Gと定額制で変わるモバイルコンテンツ」等のセッションを通じ、端末進化の背景が把握できるはずだ。

もう1つ、昨年来顕著になってきた傾向として、端末開発における共通プラットフォームの導入があげられよう。W-CDMA陣営でシンビアンプラットフォームの採用端末が急増しているほか、KDDIが今夏BREWベースの「KDDI Common Platform」を導入すると発表している。

この辺りの状況は、キャリアや端末メーカーのブースのほかインテル、クアルコムやルネサス、インフィニオンテクノロジーズ、日本テキサスインスツルメンツなどの携帯向け半導体メーカーのブースで詳しく知ることができそう。



FeliCaや携帯電話アプリを利用する業務ソリューションは、キャリアブースの目玉の1つになるはずだ

新しい広域ワイレスデータ通信サービスを実現するWiMAXにも注目が集まっている



携帯電話事業者各社のブースでは、コンシューマー向けの新ビジネスの拡大とともに、法人向けのソリューションが展示の大きな柱になりそう。携帯電話JavaやBREWなどを活用したシステム提案が主流になるとみられる。

## 注目集める非3G技術

今年にわかに注目を集めているのが、昨年10月にKDDIグループを離れ、カーライル・京セラ傘下の新会社として再出発したウィルコム。の動向である。インフラの高度化と同時に、音声通信に安価な定額料金制を導入。個人ユーザーのみならず、「格安モバイルセントレックス」ともいえる切り口で、法人ユーザーに対し積極的にアプローチしているからだ。ブース展示では特に、法人向けソリューションと、今秋に投入されると見られる新音声系端末が注目ポイントだ。13日には、ウィルコムの法人ソリューション戦略をテーマとしたセミナーも開講される。

通信技術のトレンドも大きく変化している。これまで話題の中心だった3G、さらに4Gへという通信業界主導

の次世代技術から、IEEE(電気電子学会)で標準化が進められているコンピューター業界主導の新しいデータ通信システムへ関心が移ってきている。

個人が利用するPAN(Personal Area Network)、家庭内やオフィス向けのLAN、都市圏をカバーするMAN(Metropolitan Area Network)、広域サービスのWANといった重層的な領域で、新たな無線通信技術の開発が進められている。

特に今年に入ってから、PAN分野でBluetoothとの融合が進められている超広帯域通信技術UWBや、YOZANがMAN/WAN分野での商用化を目指している高速データ通信技術のWiMAXに対する関心が高まってきた。

15日に開催される「セルラー+無線LAN時代の到来」と題したセッションでは、こうした新しい技術トレンドと、既存事業者との連携の可能性が取り上げられる。

これらの動きは、通信市場の構造変化をもたらす可能性を秘めている。今回のワイレスジャパンが、時代の大きな転換を予感させるものになることはまちがいない。



第4世代携帯電話や新方式の無線LANなど最先端の通信技術にフォーカスする次世代ワイレス技術展が昨年に引き続き併催される